

# シオドー・ドライサー『アメリカの悲劇』試論

青木 則子

## 1

『アメリカの悲劇』(*An American Tragedy*, 1925)の根底にある基本的姿勢の一つは、環境や運命等の外的要因によって変わっていく人間の諸相を描くことにある。そしてドライサー(Theodore Dreiser, 1871-1945)は、家族を始めとして、生涯の内に出会う様々な人々をもその外的要因に加えている。実在の社会的事件をモデルにしながらも、主人公クライド・グリフィス(Clyde Griffiths)の家族や彼が出会う女性や仲間等は、多くの場合ドライサー自身の体験から設定されている。そのために、『アメリカの悲劇』の中に表わされたクライドの姿には、ドライサー自身の人生が色濃く投影されているのである。

ドライサーの人間観には、両親の他に兄弟や姉達、特に姉達が及ぼした影響が強い。彼の姉達は男に誘惑されて駆け落ちをしたり、私生児を生んだりして、一人として平凡で幸福な生活を送った者はなかった。たとえば、長姉のメイム(Mame)がスキャンダルを起こしたとき、「……ドライサーはまだ10才だったが、姉の出来事は消すことのできない印を彼に残したのである。」(Although Dreiser was not yet ten years old. . . , his sister's experience left an indelible mark.)<sup>1</sup> こうした事実は、『アメリカの悲劇』においてクライドが接する女性に反映されている。クライドが心を奪われる女性は、ホーテンス(Hortense)、ロバータ(Roberta)、そしてソンドラ(Sondra)であるが、この三女性には、愛らしさ、美、上品さ、という共通の要素がある。自分の姉達の内には見出せないために、ドライサーが常に憧れていた女性の愛らしさ、美、上品さがこうした形で表現されたのだろう。又、彼が女性をすぐに性の対象として見る事には、矢張り彼の姉達の影響をうかがい知ることができる。

さて、クライドが特に魅惑される女性は、男性の側から見れば「きびしさ」(hardness)<sup>2</sup>を備えた女性である。まずクライドが最初に夢中になる女性、ホーテンスがこのタイプである。彼女と付き合うことにより、彼は愛情にも物質が必要だということを思い知らされる。こうして、しばらくの間、「きびしさ」に接していた彼は、無意識のうちに「やさしさ」(softness)<sup>3</sup>を求めようになっている。そして、それを後に出会うロバータの中に見出すのである。しかし、偶然に上流階級の子女ソンドラに会うことで、クライドの物質欲そして富や上流階級への憧れが再び頭をもたげ、強迫観念と化していくのである。

ここで、クライドの性格を分析してみると、次のような特徴があることがわかる。感激性で、感受性が強い。想像力、空想力が発達していて夢想到に陥り易い。自尊心が強い。利己的で自己中心的。意志薄弱で思考力に欠ける。勇気がなく、精神的臆病。異性や歓楽への憧れが強い。優柔不断。したがって、こうした性格のクライドは、ホーテンスに50ドル渡すか、姉のエスタ(Esta)を救うかということに始まって、事ある毎に様々なジレンマに悩まされる。そして、彼が良しとして判断して選ぶことは、実は運命のメカニズムの必然的な結果なのであり、皮肉にもその究極は死につながっているのである。

ドライサーは、人間を原子の組み合わせだったものと考えた。原子は広い意味では家族や家庭環境を指し、狭い意味では性格を指している。こうして原子の組み合わせによって決定された人間は、今度は、出会ったり、接したりする人々や投げ込まれる環境によって、次々に原子変化を生じながら人生を過ごしていくのである。この作品においても、ドライサーは、人間がこの宇宙におけるあらゆるものに支配されてしまう哀れな原子的存在であるということを描き出そうとしたのである。伝道という、わずかな収入にしかならない両親の仕事のおかげで惨めな思いをさせられていたクライドは、同年代の少年達のように素晴らしい服装をし、きれいな女性を乗せて車を乗り回してみたいと秘かに思うようになり、漠然と家出を考え始めるのであるが、これが、夢の始まり、富への憧れ

の始まりである。グリーン・デイヴィッドソン・ホテル (Green-Davidson Hotel) に勤め始めたとき、ホテルはクライドにとって、

Kind Heaven! What a realization of paradise!  
What a consummation of luxury! <sup>4</sup>

として表現される所である。彼はそれまでそうした世界をまったく知らなかったで、少なくともこの時点では夢が実現したと思う。ところが、しばらく働き、ホテルに出入りする金や地位のある人々を見るうち、「あれ（ホテルの仕事）は、あまりにも野心に燃えている僕のような青年にはあまり向かない……」（It's [The hotel business is] not so very good for a young man like me — too high-flying. . . .）<sup>5</sup> という気持ちを抱くようになる。彼は、今まで知らなかった世界を知ったがために、欲望に目覚め、はっきりと成功を意識するようになっていく。この成功にたいする意識は、偶然に勤めることになるユニオン・リーグ・クラブ (Union League Club) では、「いつの日か成功するだろう、たとえ大きな成功でなくても、少なくとも今までよりははるかにずっと。」 (some day he might succeed, if not greatly, at least much better than he had thus far.) <sup>6</sup> という確信にまで高められる。

その後、叔父サミュエル (Samuel) の経営するライカーガス (Lycurgus) の工場で働くようになり、上流社会に属するサミュエル一家に接することになる。更に、工場では、自分が社長の身内という違った目で見られていることを知り、彼の心には機会を利用しようという決意が生じる。少年の頃は夢に過ぎなかった富や成功が、今や、決心という決定的なものに変貌していくのである。また、リチャード・リーハン (Richard Lehan) が述べているように「クライドが場面から場面へと移っていくにつれて、彼の世界は次第に大きくなり、より洗練され、よりぜいたくになっていく。そして舞台が高級になるにつれ、クライドの野心は、彼が見るものすべてに直接比例して広がっていくのである。」

(As Clyde moves from scene to scene, his world gets larger, more refined, and more luxurious. And as the scene heightens, Clyde's appetite expands in direct proportion to all that he sees.)<sup>7</sup>

富や成功へのクライドの憧れは、ソンドラとの出会いによって、尽きることのない炎のように燃焼し続ける。彼女との仲が深まるにつれて「このような若さと美と富、それ以外にいったい重要なものがあるだろうか。」(Youth, beauty, wealth such as this — what would it not mean?)<sup>8</sup> という考えだけが脳裏を駆け巡り、一種の強迫観念となる。それはロバータとの事件を誘発したばかりでなく、彼を盲目にしてしまう。拘置されてもなお、成功の夢と結び付いたソンドラにたいする「恐ろしいほどの情熱」(dreadful fever)<sup>9</sup> は消えることがなかったのである。彼がこの世の中で最も望ましいと思っていた成功の夢が、はかなく、身の程知らぬものだったと初めて悟るのは、ようやく死刑の宣告が下る数ヶ月前で、それも、当のソンドラからの訣別の手紙を受け取った時であった。一つのささやかな望み、いや、はかない幻のような夢に過ぎなかったものが、周囲の状況次第でこのような抑えようのない欲望となり果てていく過程が見事に描かれているのである。偶然の作用の恐ろしさとともに、人間と情熱との虚しい営為に思いを馳せずにはいられない。

富や成功への夢に取りつかれた一人の若者を通して、ドライサーは、その夢いわゆるアメリカン・ドリーム (American Dream) を鋭く描き出したのである。彼自身、少年時代に、ホレイション・アルジャー (Horatio Alger, 1834-1899) の成功物語を読み、富やロマンスが貧困や困苦からかけ離れた夢の世界だと信じていた。そのため、彼も早くから成功への夢を胸に秘めていたのである。だが、現実の金持ちに対する彼の感情は憧れとは裏腹であることにも注目しなければならない。第3部の中で検事のメイソン (Mason) が富裕な人間達に抱く感情に象徴されているのだが、「あさましい金持ちども」(The wretched rich!)<sup>10</sup> 等、金持ちを批判する言葉もこの作品には多い。クライドを、富や成功の夢に取りつかれる人間に設定したことは、ドライサーの評論集『ヘイ、ラ

ブ・ア・ダブ・ダブ』(Hey Rub-A-Dub-Dub, 1920)の中に収められたエッセイ、「人生と芸術とアメリカ」(“Life, Art and America”)に表わされた彼の考え、

And although by degrees the average American feeling more and more keenly the sharpening struggle for existence, yet his faith in his impossible ideals is as fresh as ever.<sup>11</sup>

を裏付けるものであるが、一方金持階級の描き方には彼の晩年の考え方、「物質的成功は、もはや、人生における成功と同義語ではない。」(Material success is no longer a synonym for success in life.)<sup>12</sup>が反映されている。このように、『アメリカの悲劇』において、ドライサーは、物質主義、個人主義の国アメリカで出世するたった一つの方法は、仲間をさえ犠牲にすることであるという社会の実態を痛烈に訴えながら、同時に富や地位は必ずしも人間の幸福にはつながらず、人生の成功を意味するものではないということを示したのである。

## 2

幼少の頃から富や成功に憧れ、家庭から脱出する機会を狙っていたドライサーは、兄に案内され、始めて都会に触れたとき、それに魅了されたばかりでなく、人生と社会にたいする目を開かされた。『アメリカの悲劇』で、クライドが都会を「啓示的な閃光」(a revealing flash)<sup>13</sup>として受け止めるのは、この作者の体験から来ている。

クライドが初めて経験し、世界にたいする目を開かされた都会は、キャンザス・シティ(Kansas City)であった。このキャンザス・シティはその立地条件、地理的条件、都市形態から考察すると、シカゴ(Chicago)を意識して設定されたもののように思われる。シカゴはドライサーと深い関わりのある町なのである。ドライサーが、20代の初めに実際に見た

都会がシカゴであった。彼はシカゴの魅力にとりつかれ、その印象を、彼の自伝『自己を語る』(*A Book About Myself*, 1922)の中に表わしている。それによれば、彼の目に映ったシカゴは、アメリカ中のどの都市にも勝る一番の都市であり、今まで見た中で最も魅力的な都市だった。彼は、シカゴで実際に生活し、貧困や孤独や敗北感を味わうことになったが、一方ではジャーナリズムの世界に足を踏み入れることによって後の成功への道が開けた。

このように、敗北感と成功の両方を都会において体験したことは、彼の都会観を決定づけるものとなった。ドライサーは、このような体験から生まれたと考えられる都会観を、グリーン・デイヴィッドソン・ホテルのクライドの同僚、ヘグランド(Hegglund)の自己流の解釈という形で、次のように記している。「キャンザス・シティ(=シカゴ=都会)は上手に暮らす方法を知っていれば、素晴らしい生活の場所である。」(*Kansas City was a fine place to be if you knew how to live.*)<sup>14</sup> これはドライサーの都会にたいする考え方であることはいうまでもないが、まさに、現代世界における普遍的な都会の定義そのものであるとってよいだろう。

さて、クライドが接する都会(または都会を象徴するもの)は、高い壁や塀に囲まれている。この「壁」や「塀」の外にいるうちは何も起こらないが、ひとたびそれらの内側にクライドが足を踏み入れると、必ず何かが起こる。「あるアメリカの都会の商業の中心地の高い壁」(*the tall walls of the commercial heart of an American city*)<sup>15</sup> の中ではひき逃げ事件が、「(グリフィス工場の)建物の高くて赤い壁」(*the high red walls of the building*)<sup>16</sup> の中ではロバータとの出会いが、「高い練鉄の塀」(*the high wrought-iron fence*)<sup>17</sup> の中ではソンドラとの恋や湖の事件が起こり、「オーバーンの灰色で拘束する壁」(*the gray and restraining walls of Auburn*)<sup>18</sup> と「頑丈な、白いペンキを塗った壁」(*hard, white-painted walls*)<sup>19</sup> の中では死刑が行なわれる。

これらのことは、つまるところ、クライドが都会には不適者だという

ことを示唆するものであろう。とすれば、クライドの性格なり、環境なり、彼に関連する全てのものの逆を迎れば、都会における適者とは何か、都会はどのような所なのかという答えが導けるはずである。クライドの迎ってきた人生によって表わされるイメージによれば、都会は磁石的な誘引力を持ち、悲劇を生む所であり、眠っている人の目を開かせ、心理状態を具体化し、自己の本質を悟らせる所である。そして、重要なことは、そこでは適者生存の原理が適用され、支配的であるということだ。

ドライサーは人間が都会で生きる方法をこの作品で示しているが、自己の経験と絡み合って生まれた彼の都会観は、リーハンの述べた次の言葉に集約されるように思われる。

Like so many of Dreiser's characters, he also believed that he could realize this essential self only in the city.<sup>20</sup>

The city was the vortex within which he could best realize his essential self.<sup>21</sup>

すなわち、ドライサーにとって、都会は自己の本質を認識する所だったのである。華やかな外観の都会は、実は、彼にとって自己鍛練の場にほかならなかった。

『アメリカの悲劇』の中に表わされたドライサーの思想を、これまでのことから総合すれば、その思想は、人間と社会という二つのものに大きく絞られるように思われる。ドライサーは、世間が弱者を受けつけないのは、その弱者の不利な条件や、それらを克服できないという運のためなのであると考えているのであるが、主人公のクライドから引き出されるドライサーの思想を吟味してみると、ドライサーの作家としての目的——人間の運命を支配し、決定するさまざまな力を示すこと——が十分に達成されていることが理解できよう。ドライサーは、貧しくて野心に燃えたクライドと、成り上がりで裕福になったサミュエル一家が両方ともそれぞれの立場でアメリカの夢を追う姿を描くことによって、いか

に彼らが墮落してしまうかを示した。つまり、アメリカン・ドリームの裏に潜む暗黒すなわちアメリカの悲劇を貧富の両面から描き尽くしたのであり、これはこの作品の題名が意味するものでもある。このことは、彼の次のような言葉にも表わされている。

To me the average or somewhat standardised American is an odd, irregularly developed soul, wise and even forward in matters of mechanics, organisations and anything that relates to technical skill in connection with material things, but absolutely devoid of true spiritual insight, . . . and confused by and mentally lost in or overcome by the multiplicity of the purely material and inarticulate details by which he finds himself surrounded.<sup>22</sup>

確かに、19世紀後半から20世紀にかけてのアメリカは、無の状態から成功者になった石油王ロックフェラー（John Davison Rockefeller, 1839—1937）や鉄鋼王カーネギー（Andrew Carnegie, 1835—1919）等のいわゆるドリーム・メーカーの多産期であり、それと並行して、電話、ミシン、タイプライターの発明、発電気、電動機の進歩、自動車の出現等による機械文明の幕明けの時代であった。機械文明が進むにつれて、人間対人間の関係は、人間対機械、人間対物質の関係に取って代わられるようになった。ドライサーは、この作品においてそのような機械文明がもたらした精神的荒廃、そして物質社会が引き起こした精神的な墮落といった現代的な問題を暗示したのである。アメリカン・ドリームの裏にはこのような落とし穴があることを知らずに、その夢を追いつづけたクライドは、そうした社会風潮に白紙だった心を染められてしまった社会という大きな歯車の犠牲者の一人だったのだ。

『アメリカの悲劇』は生涯をアメリカン・ドリームの渦中においたドライサーの人間観や社会観の集大成である。また、虚構ではない、真実

のアメリカの部分を知る上でも貴重な作品と言えよう。そして、私達がこの作品に引き込まれるのは、私達が現在、機械文明と物質社会の爛熟期にこうして生きており、登場人物の誰かと似たような道を辿っているからに他ならない。

#### Notes

- 1 Richard Lehan, *Theodore Dreiser: His World and His Novels* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1969). p. 10.
- 2 Donald Pizer, *The Novels of Theodore Dreiser: A Critical Study* (Minneapolis: University of Minnesota, 1976). p. 240.
- 3 *Ibid.*, p. 240.
- 4 Theodore Dreiser, *An American Tragedy* (New York: New American Library, 1964). p. 39.
- 5 *Ibid.*, p. 162.
- 6 *Ibid.*, p. 169.
- 7 Lehan, p. 158.
- 8 Dreiser, p. 364.
- 9 *Ibid.*, p. 787.
- 10 Dreiser, p. 516.
- 11 Jane Benardete, *American Realism: A Shape For Fiction* (New York: Capricorn Books, 1973). p. 353.
- 12 W. M. Frohock, *Theodore Dreiser* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1972). p. 41.
- 13 Dreiser, p. 29.
- 14 *Ibid.*, p. 51.
- 15 *Ibid.*, p. 7.
- 16 *Ibid.*, p. 179.
- 17 *Ibid.*, p. 303.
- 18 *Ibid.*, p. 755.
- 19 *Ibid.*, p. 756.
- 20 Lehan, p. 15.
- 21 *Ibid.*, p. 30.
- 22 Benardete, p. 336.